

メッセージアウトライン

マタイの福音書9：35～38

「収穫は多いが、働き手が少ない」

[35]「それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた」

イエスは目の見えない人たちの目にさわって目がみえるようにされ、悪霊につかれて口のきけない人から悪霊を追い出され、ものを言うことができるようにされた。そして人々は「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」と非常に驚いたのであった。→9：27~34

今日の箇所はそれに続くところである。この35節ではイエスの働きが三つの面で言い表されている。

①すべての町や村を巡った(もちろん弟子たちも一緒である)。「すべて」といってもイスラエルの国中ではなく、今活動しておられるガリラヤ地方にある町や村のことであろう。(当時は自動車も飛行機もない)イエスは一日中座っているようなことはせず、疲れをもいとわず、ガリラヤ地方のすべての町々、村々を巡られたのである。ここにイエスの父なる神の使命に忠実に従い、人々に福音を伝えようとする熱心な姿を見ることができる。

②会堂で教え、御国の福音を宣べ伝えられた。イエスが町々や村々を巡られたのは選挙演説や観光旅行のためではなく、神の国の福音を宣べ伝えるためであった。→「悔い改めなさい、天の御国が近づいたから」(4:17)そしてユダヤ人の会堂では聖書から説き起こし、ご自分が救い主であることを示されたのである。→ルカ4：15~21

③あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒された。律法学者や祭司たちは犠牲の動物や穀物などを献げ、律法を守ることに頑ななまでに忠実であったが、困っている人を助けるとか貧困者に愛の手を差し伸べるとか、こちらから出て行って愛を示すということにおいては冷淡であった。しかしイエスの教えられる福音はことばだけにとどまらず、愛の行為が伴った。イエスは病人を癒し、飢えた者に食べ物を与え、悪霊を追い出し、悲しむ者を慰めるために多くの時間を費やしておられる。それでイエスの救いは単なる冷たい理論ではなく、あらゆる種類のわずらいをも癒される実際の行為をも含んでいるのである。それゆえこの35節のことばはこれまでにイエスが行ってこられた働きを三つの面に要約した結論的なことばなのである。

[36]「また、群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである」

「深くあわれまれた」ということばはギリシア語(σπλαγκνίζμαι)では心の底から激しく動かされて、積極的にあわれみの働きをせざるをえない心情を示すことばである。

イエスが神の国の福音を宣べ伝えるその原動力となったのは、みじめな状態の群衆に対する救い主としての深いあわれみであった。

イエスはすべての町や村を巡っておられる間に一つの事実に気づかれた。群衆は飢えたように彼の説教に聞き入る。またあらゆる病気、あらゆるわずらいに倒れた病人がひっきりなしに連れて来られる。こうした体験、こうした事実からイエスは群衆が羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れているとご覧になったのである。

羊は方向感覚があまりなく、道に迷っても引き返すことができない動物である。そして簡単に野獣の餌食になってしまう。羊飼いのいない羊があちこちの山や谷をさまよい、岩に傷つけられ、枝で引っかかれ、弱り果てて倒れている状態こそ今の群衆の姿なのである。当時のユダヤはローマ帝国の統治下にあり一応表面的には平和な日々であった。ローマ皇帝からユダヤの王に任じられたヘロデ大王はエルサレム神殿を始め、数々の豪華な建築工事を進め、その息子ヘロデ・アンテパスもガリラヤの領地の町や王宮を美しく建造していた。それで一見、社会は平和と繁栄を楽しんでいるように見えた。しかし、民衆はそうした表面的繁栄とは裏腹に心は荒れすさみ、魂の深みにおいては傷つき、倒れこんでいたのである。聖書ではイスラエルの民はしばしば羊にたとえられており、祭司、預言者、王のような指導者が羊飼いにたとえられている。そういった指導者たちが自己の利益のみを追い求め、聖書の教えから外れて、心の欲望のままに歩み、まことの神に従わず、民を顧みず、自己中心で罪深い生き方をしていた。罪とは的外れという意味があり、神に従い、神を信じて歩む生き方から外れて迷い出ている状態。このような状態では民を正しく導き治めることはできない。それゆえ、民は羊飼いのいない迷える羊のように、散りぢりばらばらで傷つき倒れていた。イエスはそうした精神的荒廃を実際に肌で感じられたのである。

[37-38]「そこでイエスは弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。』」

ここで言われている「収穫」とは直接的には大麦、小麦などの穀類の収穫のことと思われるが比喩的には神の国へ入れられる人々、救われるべき人々のことである。

救われなければならない人々は非常に多いが、そのために働く働き人が少

ないというのである。これは今から約二千年前にイエスが語られたことばであるが、今はそのことばが当てはまらないかと言えばそうではない。昔も今もイエスが語られた状況は変わっていない。収穫は多いのである。そして働き人が出ていくなれば必ず収穫がある。しかし、現状は見渡す限り実っている畑を前にして刈り入れ人が圧倒的に少ないのである。それゆえイエスは収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさいと言われるのである。収穫の主とはもちろん神のことである。そんなまどろっこしいことをせずに、神様が直接働いて救われる人々をかき集めてくれれば良いのにと、思うかもしれないが、それは神の取られる方法ではない。神は私たち人間を用いられるのである。

人が行う福音宣教は小さな力に見えるが神はその方法を選ばれたのである。

→I コリント1：21「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです」

イエスがご自身の十字架と復活の後、天に上げられる前に弟子たちに語られたことばは、「わたしは天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るよう教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」(マタイ28：18~20)であった。

そして神はイエスを自分の救い主と信じる者に聖霊を与えてくださった。聖書に示されている神は父なる神、子なる神イエス・キリスト、そして聖霊なる神であり、この聖霊なる神が信仰者と共にいて助けくださり、信仰生活を守り導き、神の国の福音を宣べ伝えさせる力を与え、また人々の心に働いてイエスを救い主として受け入れることができるようにしてくださるのである。→ヨハネ14：16~17、26

使徒の働き2章を読むと、ユダヤの祭りである五旬節(ペンテコステ)の日に、集まっていた百二十人(1:15)ほどの弟子たちに聖霊が下ったことが書かれている。これは主イエスが天に昇られる前に弟子たちに前もって教えておられたことであつた。→使徒1：3~5

そしてその約束のとおり五旬節の日に弟子たちに聖霊が下り、聖霊に満たされた弟子たちは聖霊が語らせるままに他国のいろいろなことばで福音を宣べ伝え始めたのであつた。

(五旬節…イスラエルがエジプトでの奴隷状態から解放されたことを記念

する過越の祭りから数えて五十日目にあたる日に持たれ、大麦の収穫を神に感謝する祭り)

これは色々なことばを話す全世界の人々、国民に、福音が宣べ伝えられていくということの象徴的な出来事であった。ペテロはこの出来事を説明して、これは預言者ヨエル (BC9世紀頃)を通して語られたことの実現ですと言った。→使徒2：17~21 この出来事後、ペテロの説教によって三千人ほどの人々が弟子に加えられた。→使徒2：41 さらに4：4を見ると男の数だけで五千人ほどになっていた。

さらにこの後、ユダヤ教当局者によるエルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の信者はユダヤとサマリアの諸地方に散らされていた。しかし、彼らは隠れキリシタンのようになるのではなく、散らされていった先々で、みことばの福音を伝えながら巡り歩いたのであった。これにより福音はイスラエルの国中及び外国にまで伝わることになったのである。→使徒8：1~4

このように、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」との主イエスの大宣教命令はイエス・キリストを自分の救い主と信じる信仰を持った人々が、その福音を宣べ伝えることによって実践され拡大、成長していくのであった。このように聖霊は人を通して働かれるのである。

それから約二千年後の今日も聖霊はイエス・キリストを自分の救い主と信じ受け入れた人々を通して働いておられる。

今日においても収穫は多いが、働き手が少ない。それゆえ、私たちは収穫の主、収穫のために働き手を送ってください。福音を宣べ伝える働き人たちを送ってくださいと熱心に祈る必要がある。

しかし、私たち現代の信仰者もその働き手の中に含まれていることを忘れてはならない。

いつか有能で雄弁な人が与えられるかもしれない。しかし、この世的に見れば弱い者、劣った者、愚かな者を選び用いられことが神のみこころなのである。→Iコリント1：26~31